

### すへませ考

佐藤, 清 / SATO, Kiyoshi

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

33

(開始ページ / Start Page)

95

(終了ページ / End Page)

161

(発行年 / Year)

2007-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002766>

## すへませ考

佐藤 清

### 要 旨

『おもろさうし』に現れる「ませ」とその対語の「すへ（ゑ）」の解釈には、子孫説と靈力説とがある。『おもろさうし』において「ませ」とその対語の「すへ（ゑ）」は以下の三つの定型に現れる。

- ① 「ゑぞにやませ」・「てだがすゑ」等の国王の神号の一部
- ② 神女＋ゆ・が・は＋すへ・ませ（ヲ）＋希求して＋降れわちへ
- ③ 神女＋が＋すへ・ませ（ヲ）＋選びやり＋降れわちへ

②と③の構文が対句として共存する例がオモロの中にあることから、『おもろさうし』において「ませ」とその対語の「すへ（ゑ）」は子孫の意で統一して解釈すべきであることを説く。そして②と③の構文における子孫とは国王ではなく、「さしふ」・「むつき」等の下級神女を指すことを説く。

I 導入

II 子孫か靈力か

III 子孫とは誰か

IV 「ませ」の語源

V 卷十二―六九四番オモロの解釈

I 導入

① 嘉靖廿四年己巳の年きみてすりの

もゝかほうことの時に八月十九日

つちのとの酉日のとらの時に

きこゑ大きみの御まへより給申候

おしかけかふし

一 きこゑ大きみきやすへゑらひ

やりおれわちへあんしおそいしゆ

きみきやせちもちよわれ

又 とよむせたかこかませねかて

おれわちへ

又 いけなきみそろへてなりきよ

かみあとへて

又 とし八とせなるきやめおほつ

たけおきやつめ

又 ゑか八とせなるきやめかくら

たけおきつめ

又 あんしおそいかおこときみ

てつりまとさ

又 わうにせかおことみものあすひ

まとさ

又 大ころたそろへてもちやへこたあとへて

又 きみいきよいこのめぬし

つかいこのめ

又 つかいて、よしられおことて、  
よしられ

又 あかくちやかよいつきおほつ  
たけとよて

又 あんしおそいかおこと  
大きみにしなて

『おもろさうし』(尚家本) 卷十二・六九四

このオモロ、安仁屋本系の田島本・仲吉本では前書の最初に「尚元王御代」とある。仲吉本をテキストとする仲原善忠・外間守善『校本おもろさうし』四二六頁の頭注は『尚元王御代』は、尚本になく、後世の記入らしい。朱書き小字である。尚元は尚清の誤り。」とし、「己巳は乙巳の誤り」とする。宮里朝光『琉球歴史便覧』一二三頁によれば、中国暦の嘉靖二十四年(西暦一五四五年)は、干支が己巳で、尚清王の代である。

本論では、このオモロで第一節「きこゑ大ききやすへゑらひやりおれわちへ」に現れる「すへ」と、第二節「とよむせたかこかませねかておれわちへ」に現れる「ませ」について論じたい。

オモロという歌謡は、対句部と反復句(refrain)の二重構造から成り立っている。このことを理解する上で、ひいては本論を理解していただく上で、玉城政美「おもろと儀礼歌謡」四六〇四七頁の

左の論が有益である(傍線引用者)。

オモロの来訪神歌謡の構造は、(1)神女の来訪、(2)王権強化の儀礼、(3)王権の状態の三つにまとめられる。オモロは、対句部に神女の行動を描写し、反復句に王の状態を描写するという構造になっているのが一般的である。神女が他界から来訪し、守護の行動を展開すること、王が理想的な状態で存在することとは、オモロのなかでは、歌形上、きりはなされたかたちで表現されているが、論理的に整理すれば、来訪神である神女の守護のはたらきかけの結果、王の理想的な状態が実現すると解釈することができるのである。

神女が他界から来訪することをえがいたオモロのグループは、神女が天上の他界オボツ・カグラから地上の聖地に降りることをえがいていて、来訪神の一形態をしめしている。他界から来訪した神女は、聖地において、さまざまな行動をおこなう。来訪神をえがいたオモロの語り手は、来訪神の側に属するが、しかし、来訪神集団の中心的存在としての、高級神女ではない。集団の一成員である、下級の神女である。この視点からできごとがえがかれる。

六九四番オモロにおいては、「あんしおそいしゆきみきやせちもちよわれ」(按司襲い(王様)こそ聞得大君のせぢ(霊力)を持ち給え)が反復句であり、対句部の第一節「きこゑ大ききやすへゑらひやりおれわちへ」と第二節「とよむせたかこかませねかておれわちへ」が対句をなしているわけである。

『混効験集』（評定所本）の坤巻の言語の部には「すへませ 子孫の事也」・「ませ 人の筋目真筋と云事なり」と見える。

鳥越憲三郎『おもしろさうし全釈』第三卷二二六―二二七頁はこのオモロの「解釈」を次のとおり行っている。

- ① ② 鳴りひびく靈力のすぐれた者なる開得大君が、神の子孫なる自分をえらび求めて、天から降りていらつしやつて、国王さまは神の靈力を自分のものとしてお持ちなされよ。
- ③ 聖なる神としての女神官をととのえ誘つて、……
- ④ ⑤ 長い年月に及ぶまで、天界の御嶽にとどめておき、……
- ⑥ ⑦ 国王のお言葉に対し、君手摩神が現われて、美しい神遊びをするのに間があったことよ。……

- ⑧ 役人や兵士たちを、ととのえ誘つて、……
- ⑨ 神との間をとりもつ神の使者を愛せよ。……
- ⑩ 使者のお言葉として申し上げ、……
- ⑪ 火神が乗り移つて、天界の御嶽へ鳴りひびいて、……
- ⑫ 国王のお言葉は、大君に聞きとどけられて、……

玉城政美『南島歌謡論』五二―五二四頁はこのオモロを次のように分析する（『南島歌謡論』は『校

本おもしろさうし』の校訂テキストをテキストとする）。

つぎのオモロの対句部は、前半の第五節までが神女の行動をしめし、a 神女が靈力を選んで降りる、b 下級神女を揃える、c 八年間他界の聖地に滞在する、というモチーフの構成になっている。第六節以下の d e f は王の指図によつて神女を招き寄せるモチーフである。

- |       |          |       |        |       |       |
|-------|----------|-------|--------|-------|-------|
| 一 きこゑ | 大きみぎや    | すへ    | ゑらびやり  | おれわちへ | a     |
| 又     | あんじおそいしゆ | きみぎや  | せぢ     | もちよわれ |       |
| 又     | とよむ      | せだかこが | ませ     | ねがて   | おれわちへ |
|       |          |       |        |       | a     |
| 又     | いけなぎみ    | そろへて  | なりきよぎみ | あとへて  | b     |
| 又     | とし       | 八とせ   | なるぎやめ  | おぼつだけ | おきやつめ |
|       |          |       |        |       | c     |
| 又     | ゑが       | 八とせ   | なるぎやめ  | かぐらだけ | おきつめ  |
|       |          |       |        |       | c     |
| 又     | あんじおそいが  | おこと   | きみてづり  | まどさ   | d     |
| 又     | わうにせが    | おこと   | みものあすび | まどさ   | d     |
| 又     | 大ごろた     | そろへて  | もりやへこた | あとへて  | d     |
| 又     | きみいきよい   | このめ   | ぬしつかい  | このめ   | d     |
| 又     | つかいてゝ    | よしられ  | おことゝ   | よしられ  | d     |
| 又     | あかぐちやが   | よいつき  | おぼつだけ  | とよで   | e     |

又 あんじおそいが おこと 大ぎみに して

f (六九四)

cの「おぼつだけ おきやつめ(オボツ嶽に滞在して)」「かぐらだけ おきつめ(カグラ嶽に滞在して)」のオボツ嶽、カグラ嶽は天上の他界オボツ・カグラにある聖地をしめし、そこに神女が滞在することをあらわしている。(中略)

「とし 八とせ なるぎやめ(年の八年になるまで)」「ゑが 八とせ なるぎやめ(吉日の八年になるまで)」は、神女が滞在する時間的な状況をしめしているが、神女は他界において、ながい時間滞在し、容易には降りてこないことをあらわしている。dの王のセリフ「みものあすびまどさ、きみいきよい このめ、ぬしつかい このめ(見物遊びが待ち遠しい、君を招く準備をせよ、主を招く準備をせよ)」は、他界の聖地に長期間滞在している神女にたいする、社会の代表としての王の、降臨を待望するきもちと、その準備の指図をあらわしている。

eの「あかぐちやが よいつき おぼつだけ とよで(赤口が感応して、オボツ嶽に王の言葉が響いて)」は、他界と往来し、神々の伝達者としての役割をになう火の神が王の言葉を他界に伝えることをあらわし、fの「あんじおそいが おこと 大ぎみに して(王の言葉が大君に適って)」は、儀礼を待望する王の心が他界に滞在する聞得大君に届いたことをあらわしている。岩波文庫の外間守善『おもしろさうし』(以下、岩波文庫本とする。)上四五八〜四六〇頁には次のように見える(上段は仲吉本をテキストとした校訂テキストに漢字を当てたもの、下段は脚注)。

尚元王御代

尚元王御代 尚家本にはない。後世の書き入れであろう。

嘉靖廿四年乙巳の年、君手摩り

尚元王は第四代尚清王の誤り。

の百果報事の時に、八月十九日  
己の酉日の寅の時に、聞得大君

嘉靖廿四年乙巳の年 尚清王十九年(一五四五)。乙巳は  
底本「己巳」。

の御前より給申候  
おしかけが節  
一 聞得大君ぎや

君手摩りの百果報事 神々が出現し、王の即位を祝福する  
祭式。

末 運びやり 降れわちへ

末・真末 子孫。後裔。真末は末の美称。

按司襲いしゆ

又 鳴響む精高子が

君ぎやせち 神女の持っている靈力。

又 真末 願て 降れわちへ

又 いけな君 揃へて

いけな君 現世に生きている神女。

又 成り子神 集へて

成り子神 神が依憑し神に成り変わった神女。

又 年 八年 成るぎやめ  
おぼつ嶽 おきやつめ

おぼつ嶽・神座嶽 天上の御嶽。

又 吉日 八年 成るぎやめ

おきやつめ 未詳語。留め置かれてか。

神座嶽 おき（や）つめ

又 按司襲いが御言

按司襲いが御言 按司様（王）の御言葉。

君手摩り 間遠さ

君手摩り「君手摩りの百果報事」に同じ。

又 王にせが御言

王にせが御言 王様の御言葉。「にせ」は敬称辞。

見物遊び 間遠さ

見物遊び 美しい神遊び。君手摩りの祭式に行なわれる神

又 大ころ達 揃へて

遊びのこと。

又 守り合へ子達 集へて

大ころ達 男たち。男たちの美称。

又 君いきよい このめ

守り合へ子達 守り合う人たち。

又 主使い このめ

君いきよい・主使い 神女の招請。

又 使いて、よ知られ

御言て、よ知られ

又 赤口が 依い憑き

赤口 火の神。太陽神。

おぼつ嶽 鳴響で

又 按司襲いが御言

大君に撓て

大君 聞得大君。

撓て 調和して。和合して。撓って。底本「してなて」。

岩波文庫本はこのオモロの「大意（口語訳）」を次のとおり示している。

名高く靈力豊かな聞得大君が、太陽神の末裔を選んで天降りをし給うて、いけな君神女を揃えて、成り子神神女を集めて、吉日の八年になるまで、天上のおぼつ嶽、神座嶽に置きとどめて、按司様の御言葉、国王様の御言葉でなされる神女たちの祈り、美しい神遊びの待ち遠しいことよ。勝れた男たち、守護する人たちを揃え集めて、君、主神女たちの招請を考えよ。お招きだといって、御言葉だといって、お知らせがあり、赤口が依り憑き、天上のおぼつ嶽に鳴り轟いて、国王様の御言葉が聞得大君に撓い合合して見事なことよ。国王様こそ、君神女の靈力を持ち給え。池宮正治「おもろの表現——適合調和する讃歌」二六〇二七頁はこのオモロを次のとおり訳している。上は尚家本をテキストとした校訂テキスト、括弧内が訳。

きこゑ大きみぎや（聞得大君が）

すへゑらびやり おれわちへ（精を選んで降りたまいて）

あんじおそいしゆ（按司襲いⅡ王こそ）

きみぎやせぢ もちよわれ（君の精地Ⅱ靈力 持たたまえ）

又 とよむせだかこが（鳴響む精高子が）

ませねがて おれわちへ（真精を願って降りたまいて）

又 いけなきみ そろへて（現世の君を揃えて）

なりきよかみ あとへて（神になつた神女を誘つて）

又 とし八とせ なるぎやめ（年の八年になるまで）

おぼつたけ おきやつめ（天上のおぼつ嶽が加護し）

又 ゑか八とせ なるぎやめ（吉日の八年になるまでも）

かぐらたけ おきやつめ（天上の神座嶽が加護し）

又 あんじおそいがおこと（按司襲いのお言葉に）

きみてづり まとさ（君手摩りの儀礼が間遠いと）

又 わうにせがおこと（王にせのお言葉に）

みものあすび まとさ（見物神事が間遠いと）

又 大ごろた そろへて（立派な男たちを揃えて）

もりやへこた あとへて（守り合い子たちを集めて）

又 きみへきよい このめ（君の招待を企図し）

ぬしつかい このめ（主<sup>ニ</sup>神女の招待を企画し）

又 つかいでて よしられ（使者だといつて申し上げよ）

おことでて よしられ（ご命令といつて申し上げよ）

又 あかぐちやが よいつき（赤口<sup>ニ</sup>火の神が結い付き）

おぼつたけ とよで（天上のおぼつ嶽までも鳴響んで）

又 あんじおそいがおこと（按司襲い<sup>ニ</sup>王のご命令は）

大きみに しなて（聞得大君の祭事と和合して）

「すへ」と「ませ」について、『おもしろさうし全釈』と岩波文庫本が子孫とするのに対し、『南島歌謡論』と「おもしろ表現」は靈力とするわけである。

仲原善忠・外間守善『おもしろさうし辞典・総索引第二版』（以下『おもしろさうし辞典』とする）には次のとおり見える。

すへ（末）

①子孫。後裔。「すへとめて」に対する原注に「国求て也」（四一七〇）とある。『混集（坤、言語）』に「すへとまへて」として「筋目を尋てなり」とある。また「すへませ」として「子孫の事」とある。「すゑ」に同じ。

例もゝすへに、きやめん、――とまへて、おれわちへ（三一九八）

②ゆくすえの意。「すゑ」に同じ。

例 あんしおそいしよ、――、まして、ちよわれ（一一二六）

――すへ（一精）不可視の靈力。靈力の意から転じて一種の美称辞ともなる。↓きみきや――くも



こゝこかねーよかけー

ま―せ(真末) 真筋。直系の子孫、後裔の美称。原注に「人の筋目、真筋といふ事也」(六一・二九七)とあり、『混集』(坤・言語)にも「人の筋目真筋と云事也」とある。別に、原注に「しま也」(四・二〇八)、「ませとめて」の原注に「国求て也」(四・一七〇)とあるが、真筋、即ち直系の子孫なる王の意。対語「すへ」

【例】とよむくとよみ、―、ねがて、おれわちへ、いみやからと(三一九〇)

『おもろさうし』では、「すへ(多)」に子孫の用法と靈力の用法とがあるわけである。『おもろさうし』では、「す」の仮名は「su」の音を写すと同時に「せ」の仮名と共に「si」の音を写し(参照、拙論「すらからの速御船」)、「へ」と「多」の仮名は「い・ひ」と共に「i」の音を写しているから、「すへ(多)」は「si」の音を写していることになる。故に「\*sei」(精)と「\*sue」(末)が左の変化を起こしたのであろう。

\*sei (精) > sti    \*sue (末) > \*sue > \*sui > \*sui > sti

『沖繩古語大辞典』には次のように見える。

すゑ【末】団固 團 團 スィー スィー ①末裔。子孫。「すへとめて」に對するオモロ原注に「国求て也」(四卷一七〇)とあるが、『混集』(坤・言語)に「すへとまへて 筋目を尋てなり」とあり、「すへ」を筋目とする。また同じく「おすへおはら 御親類と云事」「すへませ 子孫の事也」とある

が、これらの「すへ」は、末から転じて子孫のこと。《しよりもり ちよわる ゑそにや すへ あちおそい/またまもり ちよわる てたか すへ あちおそい》(団二卷九七)《さまは かななる かたきの 末か 思ひ忘れゆる 暇も ないらぬ》(團全九七五)②終わり。結末。ゆくすゑ、の意。《はあ あれ程の 村原も 運の 末<sup>すゑ</sup> なければ》(團大川一八〇下)(後略)すへ【精】団 固 精。セジに似た不可視の靈力。オモロ原注に「勢軍の事也」(一九卷一二九七)とあるが、セジの意である。靈力の意から転じて一種の美称辞ともなる。↓こがねすへ 《あまみやから すへのきみ やれはしねりやから あいちへきみ やれは》(団四卷二〇八)【調形】すい・すへ・すゑ

ま―せ【真せ】団 真筋。直系の子孫、後裔の美称。オモロ原注に「人の筋目、真筋といふ事也」(六卷二九七)とあり、『混集』(坤・言語)にも「ませ 人の筋目 真筋と云事なり」とある。別に、オモロ原注に「しま也」(四卷二〇八)、「ませとめて」の原注に「国求て也」(四卷一七〇)とあるが、真筋、即ち直系の子孫なる王の意であらう。「せ」については「すゑ(末)」「すへ(靈)」「せい」(精)との関わりが考えられるか。対語「すへ」《ゑそにや ませ あちおそい てたか すゑ あちおそい》(団二卷四〇)

すゑ―ま―すゑ【末真末】團 子孫。『混集』(坤・言語)に「すへませ 子孫の事也」とある。「すへませ」は「末、真末」から転じたものであろう。

『沖繩古語大辞典』では「ませ」について、「ま—せ【真せ】」の項では「せ」については「すゑ（末）、すへ（盡）、せい（精）」との関わりが考えられるか」とし、「すゑ—ま—すゑ【末真末】」の項では真末からの転としてゐるわけで、両者の間に齟齬が見える。「ませ」という語によくわからない点があることを示していると言えよう。

池宮正治『琉球古語辞典 混効駿集の研究』は、「すへませ 子孫の事也。」の項（二二九頁）で次のとおり述べる。

○すへませ このあたりおもしろ語と思われるが、「すへませ」というのではない。おそらく「すへ」と「ませ」であろう。原注「ませ」に「人の筋目、真筋といふ事也」（六の七）とある。「おもしろさうし」巻七の十九に「聞得大君ぎや すへ 求めて 降れわちへ」、「鳴響むせ高子が ませ 求めて 降れわちへ」とある。ただし「すへ」「ませ」は靈力の意味もある。

同書は「ませ 人の筋目。真筋と云事なり。」の項（二八三頁）では次のように述べる。

○ませ 真精。靈力（せ、せぢ）の褒めた言い方。「おもしろさうし」巻二十の四五他に「鳴響む国守りぎや 真せ選びやり 降れわちへ」とある。

さらに同書は「すへとまへて 筋目を尋てなり。」の項（二八四頁）で次のとおり述べる。

○すへとまへて 靈力を求めて。「おもしろさうし」巻二十の五十に「聞こゑせん君ぎや すへとまへて 降れわちへ」とある。

池宮はこの「すへ（ゑ）」と「ませ」に靈力と子孫の二つの用法があると主張するわけである。

## II 子孫か靈力か

この子孫か靈力かという問題は「すへ（ゑ）」を見ているかぎりでは決着がつきそうにない。対語の「ませ」に着目したい。六九四番オモロ以外の「ませ」とその対語として現れる「すへ（ゑ）」の用例を以下に示そう。（当該の「すへ（ゑ）」と「ませ」は対句部にのみ現れるので反復句は省略し、理解の便宜を図るために分ち書きを施す。）

- ⑥ 又 ゑそにやませあちおそい てたかすゑあちおそい（巻一・四〇）
- ⑦ 一 きゑせのきみきや すゑ とめて おれわちへ
- ⑧ 又 とよむくにとよみ ませ ねかて おれわちへ（巻三・九〇）
- ⑨ 又 首里もり ちよわる ゑそにやすゑあちおそい
- ⑩ 又 またまもり ちよわる てたかませうきゆくも（巻三・九〇）
- ⑪ 又 もゝすへにきやめむ すへとまへて おれわちへ
- ⑫ 又 やそすへにきやめも ませ とまへて おれわちへ（巻三・九八）
- ⑬ ① きゑあおりやへは すへ とめて おれわちへ

又 とよむくにもりきや ませ とめて おれわちへ (巻四・一七〇)

㉔ 一 しより大ききや 首里もり おれわちへ

又 とよむきみとよみきや ませ ねかて おれわちへ (巻四・二〇八下 巻六・二九四下 巻廿一・三三七上)

㉕ 一 きこゑせんきみきや すゑ とまいて おれわちへ

又 とよむきみとよみきや ませ ねかて おれわちへ (巻四・二二一下 巻六・二九七下 巻十二・七四五下 巻廿一・三三八〇)

㉖ 一 しより大ききや すへ ゑらひやり おれわちへ

又 とよむくにもりきや ませ ゑらひやり おれわちへ (巻六・二九二下 巻廿一・一三七五下 巻四・二〇六)

㉗ 一 きこゑ大ききや すへ とめて おれわちへ

又 とよむせたかこか ませ とめて おれわちへ (巻七・三六三)

㉘ 一 しより大ききや さしふ ゑらて おれわちへ

又 とよむくにおそいか すへ とめて おれわちへ

又 かくらきやめ とよて さしふ ゑらて おれわちへ

又 おほつきやめ とよて ませ と(めて) おれわちへ (巻十二・七二四)

㉙ 又 てるかはは のたて、すへ とめて おれわちへ

又 てるしのは のたて、ませ とめて おれわちへ (巻十二・七三三)

㉚ 一 きこゑ大ききや すへ ゑらひやり おれわちへ

又 とよむせたかこか ませ ねかて おれわちへ (巻十二・七三五)

㉛ 一 きこゑさすかさか すへ とめて おれわちへ

又 とよむ大ききや ませ ねかて おれわちへ (巻十二・七三七)

㉜ 一 きこゑあおりやへや きみきや すへ おれわちへ

又 とよむくにもりや ませ ねかて おれわちへ (巻十二・七四二)

㉝ 又 またまもり ちよわる ゑそにやませあちおそい (巻十三・八五四)

これらの用例を見ると、「ませ」とその対語の「すへ(ゑ)」の用法は、三つの定型に分れることが判る。その一つは、㉕㉖㉗に現れる国王の神号としての用例である。念のため用例をもう一度示す。

㉕ 又 ゑそにやませあちおそい てたかすゑあちおそい (巻一・四〇)

㉖ 又 首里もり ちよわる ゑそにやすゑあちおそい

又 またまもり ちよわる てたかませうきゆくも (巻三・九〇)

㉗ 又 またまもり ちよわる ゑそにやませあちおそい (巻十三・八五四)

『蔡鐸本中山世譜』(一七〇一年)の巻五には、「尚寧王(中略)神名日賀末按司添加那志」と見える。

『おもろさうし辞典』には以下のとおり見える。

ゑそーにやーませーあちーおそい（英祖にや真末按司添い）「ませ」は真筋、直裔の意。英祖王の直裔である王様。

ゑそーにやーすへーあちーおそい（英祖にや末按司添い）英祖王の末裔である王様。国王に対する尊称。

てたーかーすへーあちーおそい（テダか末按司添い）日神の末裔である王の意。国王に対する尊称。「あちおそい」の「おそい」は守護し支配するの意をもつ敬称辞。

てだーかーませーうきゆーくも（テダか真末浮雲）日神の真の末裔の貴き人の意。「ませ」は末裔すなわち真末。「うきゆくも」は貴き人、身分高き人の意。王をほめ讃えた表現である。

池宮正治は『琉球国王の神号と』『おもろさうし』において、㉔が現れる巻三一九〇番オモロを解釈し、「ゑそにやすゑあちおそい」を「英祖仁耶末按司襲い」とする（一七頁）。そこでは何故か対句の「またまもりちよわるてたかませうきゆくも いみやからと」（「いみやからと」は反復句）が脱落しているのであるけれど、池宮はこの論文で「ゑそにやすゑ」について『英祖仁屋末なる』と尚永の神号を修飾したものである。（一九頁）とも述べている。そして巻三一九七番オモロを解釈して、「ゑそにやすへあちおそい」を「英祖仁屋末按司襲い」尚永王」とし、「てたかすへあちおそい」を「太陽の末按司襲い」尚寧王」としている。ところが池宮はこの論文における巻十二一七四一番オモロの解

釈では「てたかすへあちおそい」を「太陽の精を受けた按司襲い（尚寧）」としている（二二頁）。これは不可解である。「すへ（ゑ）」と「ませ」について池宮の思考は混乱している。

「ゑそにやすゑ」と「てたかすゑ」の「すゑ」は末であつて子孫の意味で統一的に解釈すべきである。そこから対語の「ゑそにやませ」と「てたかませ」の「ませ」も子孫と解することになる。

二つめの定型は、㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞に見られる構文である。ここも用例をもう一度示す。

㉔ 一 きゑせのきみきや すゑ とめて おれわちへ

又 とよむくにとよみ ませ ねかて おれわちへ（巻三一九〇）

㉕ 又 もゝすへにきやめむ すへ とまへて おれわちへ

又 やそすへにきやめも ませ とまへて おれわちへ（巻三一九八）

㉖ 一 きゑあおりやへは すへ とめて おれわちへ

又 とよむくにもりきや ませ とめて おれわちへ（巻四一七〇）

㉗ 一 しより大きききや 首里もり おれわちへ

又 とよむきみとよみきや ませ ねかて おれわちへ（巻四一二〇）  
 八廿巻六・二九四廿  
 廿一三七七

㉘ 一 きゑせんきみきや すゑ とまいて おれわちへ

又 とよむきみとよみきや ませ ねかて おれわちへ (巻四・二二・一廿卷六・二九七廿卷  
十二・七四五廿卷廿一・一三八〇)

① 一 きこゑ大ききみきや すへ とめて おれわちへ

又 とよむせたかこか ませ とめて おれわちへ (巻七・一三六三)

④ 一 しより大ききみか さしふ ゑらて おれわちへ

又 とよむくにおそいか すへ とめて おれわちへ

又 かくらきやめ とよて さしふ ゑらて おれわちへ

又 おほつきやめ とよて ませ と(めて) おれわちへ (巻十二・七二四)

① 又 てるかはは のたてゝ すへ とめて おれわちへ

又 てるしのは のたてゝ ませ とめて おれわちへ (巻十二・七三三)

② 一 きこゑさすかさか すへ とめて おれわちへ

又 とよむ大ききみきや ませ ねかて おれわちへ (巻十二・七三七)

⑤ 一 きこゑあおりやへや きみきや すへ おれわちへ

又 とよむくにもりや ませ ねかて おれわちへ (巻十二・七四二)

これらの例は左の構文に整理することができる。

神女 + ゆ・が・は + すへ・ませ (フ) + 尋<sup>もと</sup>まへて・願<sup>ねが</sup>て + 降<sup>くだ</sup>れわちへ (降りなさった)

実際の用例では、格助詞「が」と係助詞「は」の多くは、それぞれ先行の母音の影響で口蓋化し、「が」は「ぎや」、「は」は「や」で現れている。

「とまいて・」・「とまへて・」・「とめて・」について説明しておくと、『混効験集』に「とまへる 物を探索之事又人など尋るにも云」(坤・言語<sup>げんご</sup>)・「すへとまへて 筋目を尋てなり」(坤・言語)とあり、『沖繩古語大辞典』の「とまへる」の項に「首里方言ではトウメーユンという。本土方言でも、捕らえる、つかまえるの意で『とまえる』(広島県高田郡・徳島県)がある(『日本国語大辞典』)」と見える。

⑥の「きこゑあおりやへや きみきや すへ おれわちへ」では「すへ」と「おれわちへ」の間で「願<sup>ねが</sup>て」ないし「尋<sup>もと</sup>まへて」が省略されたのである。

⑦と⑧の例は、引用箇所からは降りる主体がわからない。岩波文庫本(上八九頁)は九八番オモロの脚注で⑥の部分で「他からの混入か。」とするので今後の研究の進展を俟つことにして、①の例が現れる七三三番オモロの対句部を次に検討してみよう。

一 きこゑきみなしさしふおれかわて (聞得君加那志がサシブ神女に降り変つて)

しよりもりおれわちへ (首里杜に降りなさった)

又 とよむきみなしむつきおれなおちへ (鳴響む君加那志がムツキ神女に立派<sup>たて</sup>に降りなさつて)

またまもりおれわちへ (真玉杜に降りなさった)

又 なさいきよもいあちおそい

みまふてすおれたれ

(父なる方である王を)  
(見守つてこそ降りた)

又 あかかいなてあちおそい

(我が慈しんで敬愛する王を)

かいなてゝすおれたれ

(慈しんでこそ降りた)

又 てるかははのたてゝ

(太陽神を祈つて)

すへとめておれわちへ

(「すへ」を尋ねて降りなされた)

又 てるしのはのたてゝ

(太陽神を祈つて)

ませとめておれわちへ

(「ませ」を尋ねて降りなされた)

# (後略)

このように、「てるかはは のたてゝ すへ」とめて おれわちへ／／てるしのは のたてゝ ませとめて おれわちへ」の主体は、神女である「きこゑきみかなし」・「とよむきみかなし」なのである。

この「神女+ゆ・が・は+すへ・ませ(ヲ)+希求して+降れわちへ」という構文は次のように要約できよう。

神女+ゆ・が・は+すへ・ませ(ヲ)+希求して+降れわちへ

この構文に属さないのは①である。

① 一 しより大きききや すへゑらひやり おれわちへ

又 とよむくにもりきや ませゑらひやり おれわちへ(巻六―二九二、廿卷廿一―一三七五)

## 廿卷四―二〇六

これは、「神女+が+すへ・ませ(ヲ)+選らびやり+降れわちへ」という構文となっている。「選らびやり」は、「選ぶ」の連用形に「有<sup>り</sup>」が融合したものである。高橋俊三『おもろさうしの国語学的研究』によれば「やり」の「意味・用法は接続助詞『て』に近い。」(一八一頁)。

注目すべきは③と④の例である。

③ 一 きこゑ大きききや すへゑらひやり おれわちへ

又 とよむせたかこか ませねかて おれわちへ(巻十二―六九四)

④ 一 きこゑ大きききや すへゑらひやり おれわちへ

又 とよむせたかこか ませねかて おれわちへ(巻十二―七三五)

この二つでは、「神女+が+すへ・ませ(ヲ)+選らびやり+降れわちへ」の構文と「神女+ゆ・が・は+すへ・ませ(ヲ)+希求して+降れわちへ」の構文とが、対句の中で共存しているのである。③と④において、この二つの構文が共存していることは、この二つの構文において、「すへ(ゑ)」と「ませ」の意味が同一であり、子孫と霊力の二つの意味が混在していると考えるべきではないことを示す。このことは『南島歌謡論』四八七頁が次の形で指摘している。

「とめる(尋める)」「ゑらぶ(選ぶ)」「ねがう(願う)」などの心理動詞が、「すへ(精)」「ませ(真

精」を対象としてかわるばあいがある。尋める、選ぶ、願うなどの動詞は、心理的な態度をしめして、具体的な動作・作用をしめしてはいない。そのかわりをうける対象が「すへ」「ませ」であるが、このふたつの単語は同義語であり、かつ、多義語でもある。霊力を意味するばあいのほかに、末裔、行く末などの意味もある。以下の例がこの三つのうちの、どの意味を採用すべきであるか、はつきりとしたことはわからない。いずれにも解釈できそうであり、まようところである。しかし、すべての用例が「すへ」とめて おれわちへ」「ませ ねがて おれわちへ」「すへ ゑらびやり おれわちへ」とまったく同一の構造をなしているから、いずれかひとつの意味に決定すべきものであろう。霊力の意味になる可能性を考慮して、ここでもとりあつかうことにする。

それでは、この二つの構文に現れる「すへ（ゑ）」と「ませ」は霊力なのであろうか、子孫なのであろうか。ここで興味深いのは④の例が現れる以下の七二四番オモロである（対句部は省略）。

一 しより大きみか

（首里大君神女が）

さしふゑらておれわちへ

（サシブ神女を選んで降りなさった）

又 とよむくにおそいか

（鳴響む国襲い神女が）

すへとめておれわちへ

（「すへ」を尋ねて降りなさった）

又 かくらきやめとよて

（天上にあるカグラ嶽まで鳴り響いて）

さしふゑらておれわちへ

（サシブ神女を選んで降りなさった）

又 おほつきやめとよて

（天上にあるオボツ嶽にまで鳴り響いて）

ませと（めて）おれわちへ

（「ませ」を尋ねて降りなさった）

（後略）

このオモロでは、「すへ」と「ませ」の対語が「さしふ」である。すなわち、「すへ」「ませ」「さしふ」と解し得るのである。『沖縄古語大辞典』で「さしふ」は次のとおり見える。

さしふ 団 固 神の憑依する神女。オモロ原注に「くで也とハ託女ノ事也」（六卷二九七）とある。カミンチュ、神がかりする人、即ち神女は神の「さしふ」である。天上の神は特定の神女に憑依して現れる。Aなる神はaなる神女に憑依する。aはAのさしふである。『混集』（坤・人倫）に「さしほ くての事也 又くてとは託女の事也 今神人と云是なり」とある。八重山ではカシバという。宮古多良間島にはシャシブという男性の神役がある。

第一節の「しより大きみか さしふ ゑらて おれわちへ」について、『南島歌謡論』二五五頁は、「高級神女がサシブとよばれる下級神女に憑依する」と説く。憑依について『南島歌謡論』五二七頁は次のとおり論ずる。

神女は聖地に降臨するのであるが、降臨するところがより限定されて、サシブ・ムツキ・イケナ・ナリキヨとよばれる下級の神女のばあいがある。降臨の対象として神女が選ばれることにオモロ

の特徴がある。これは、高級神女が下級神女をよりましとする憑霊現象であり、神女の降臨の形態である。降臨の主体には「きこゑ大ぎみ(聞得大君)」「さすかさ(差笠)」「しより大ぎみ(首里大君)」「せのきみ(精の君)」「きみがなし(君がなし)」「おしかけ」「あおりやい(煽りやい)」など、『女官御さうし』に「三十三君」として名前があがっている高級神女である。

『南島歌謡論』が説くように、高級神女は「さしふ」などの下級神女に憑霊する存在なのであるから、高級神女が下級神女に霊力を希求するとしたらおかしいのではなからうか。もともと霊力をもっているのは高級神女の方であろう。下級神女「さしふ」は「しより大ぎみ」などの高級神女の子孫ということなのであろう。高級神女は、子孫である「さしふ」などの下級神女を(憑霊するために)希求して降りると考えるべきだと思う。下級神女が高級神女の子孫であるということは、次に示す『南島歌謡論』一九四〜一九五頁の論からもうかがえるのではなからうか。

つぎの例の、「あおりやへ(煽りやへ)」「きみがなし(君がなし)」は高級神女をしめし、それが下級の神女「いけな」「なりきよ」に成り変わることをしめす。この変化は、高級神女の霊が下級神女イケナ・ナリキヨに憑くことをあらわしていて、一種の憑霊現象である。この変化は神女が降りることに付随するできごとであり、このような状態で神女が聖地に降りることをあらわしている。

① 一 きこゑ あおりやへが いけな なりかわて しよりもり おれわちへ

又 とよむ あおりやへや なりきよ おれかわて まだまもり おれわちへ

(二六九)

② 一 きこゑ きみがなし いけな なりかわて しよりもり おれわちへ

又 とよむ きみがなし なりきよ おれかわて まだまもり おれわちへ (三三四)

高級神女が下級神女に「成り変わる」ということは、①が現れる二一―二九七七四五―一三八〇番オモロにもあてはまる。二―一番オモロから反復句「あちおそいに嶋かのちみおやせ」(国王様に島の命を奉れ)を除いた対句部を解釈してみよう(なお、このオモロは平山良明「再び『島が命』について」が解釈を行っているけれども、「再び『島が命』について」は「すゑ」を霊力とし「ませ」を真末とする不徹底な態度などもあって、わけのわからない解釈に陥っている)。

一 きこゑせんきみきや (聞得宜君神女が)

すゑとまいておれわちへ (「すゑ」を尋ねて降りなさった)

又 とよむきもとよみきや (鳴響む君鳴響み神女が)

ませねかておれわちへ (「ませ」を願って降りなさった)

又 あまみやからすへのきみやれは (昔から霊力豊かな神女なれば)

又 しねりやからあいちへきみやれは (昔から王の相手である神女なれば)

又 さしふ五ころに (サシブ五人に)



みまふてすおれたれ

(見守つてこそ降りた)

又 むつき七ころに

(ムツキ七人に)

かいなてゝすおれたれ

(慈しんで敬愛してこそ降りた)

又 大きみきや御さうせ

(大君のお考えで)

てるかははのたてゝ

(太陽神を祈った)

「五ころ」と「七ころ」について「再び『島が命』について」一七八頁は次のとおり論ずる。

「五ころ」は神女名か。「おもろさうし辞典」(外間守善)は「五人。『ころ』は普通『男』を意味するが、人数を使える接尾語」とする。琉球方言の「チュトウクル」(二人)、「タトウクル」(三人)、「ミトウクル」(三人)、「ユトウクル」(四人)、「イチユトウクル」(五人)などとする。おもろ研究会では、福地唯方氏の「久高島には、イチチグルー、ナナチグルーなどの神女名が現存する」との報告があり、それが、統一の見解とされている。

『沖縄古語大辞典』には次のように見える。

いつつころ【五つころ】**団 固** ①五人。「ころ」は人数を数えるときの助数詞。例文の「いつつころ」(五人)、「七つころ」(七人)の、「五」「七」は、聖数である。《さしふ ひとつころ》におれなおちへからは／さしふ ひとつころに おれなおちへからは《**団六卷三二二**》  
ななつころ【七つころ】**団** オモロ語の「ころ」は一般に男を意味するが、ここでは神の依り

憑く人をいうようである。対語の「いつつころ」は神がよりつく神女の名としてイティイグルーの形で現在も久高島にある。「ななつころ」はこのイティイグルー(五つころ)の「いつつ」に対して「ななつ」と応じた語だろう。

すなわち、「いつつころ」の項では五人とし、「ななつころ」の項では神女名としているわけ、なんともすっきりしない。

「いつつころ」「ななつころ」の用例を閲するに、常に「さしふ五ころ」「むつき七ころ」のように「さしふ」「むつき」とセットで現れ単独で現れる例は無く、しかも常に「さしふ」「むつき」の後に現れて前に現れた例が無いことと、「さしふいつ人」(巻廿一・一三九六)という例があることから、五人・七人の蓋然性(probability)が高いと私は考える。

このオモロの第五節・第六節「さしふ五ころにみまふてすおれたれ／むつき七ころにかいなてゝすおれたれ」の主体は、第一節と第二節に現れる神女「きこゑせんきみ」・「とよむきみとよみ」である。「きこゑせんきみ」・「とよむきみとよみ」は降臨してなりましである「さしふ」と「むつき」に成り変わる。ここから、「すゑ」Ⅱ「ませ」Ⅱ「さしふ」・「むつき」と解しうる。「さしふ」・「むつき」は「きこゑせんきみ」・「とよむきみとよみ」の子孫と考えてよいと思う。

「さしふ」と「むつき」が高級神女の子孫であることは、先に『南島歌謡論』を援用した際に見えた巻六・三三四番(と重複の巻十二・七三四番)オモロからも言える。便宜上三三四番の対句部を左

に示す。

⑨ 一 きこゑきみなし

(名高い聞得君加那志神女が)

いけななりかわて

(イケナ神女に成り変つて)

しよりもりおれわちへ

(首里杜に降りなさつた)

又 とよむきみなし

(鳴響む君加那志神女が)

なりきよおれかわて

(ナリキヨ神女に降り変つて)

またまもりおれわちへ

(真玉杜に降りなさつた)

又 さしふ五ころに

(サシブ五人に)

すへとめておれわちへ

(子孫を求めて降りなさつた)

又 むつき五ころに

(ムツキ五人に)

みまふてすおれたれ

(見守つてこそ降りた)

又 なさいきよもいあちおそい

(父なるお方である国王様の)

およりとておれわちへ

(お為を計つて降りなさつた)<sup>(12)</sup>

又 あかかいなてあちおそい

(我が慈しんで敬愛する国王様を)

みまふてすおれたれ

(見守つてこそ降りた)

又 てるかはかうさししゆ

(太陽神の御命令でこそ)

このきらにおれわちへ

(この吉日に降りなさつた)

このオモロの第三節の「さしふ五ころにすへとめておれわちへ」は、「神女十・が・は十すへ・ませ(ヲ)十希求して十降れわちへ」の構文に「さしふ五ころに」がはさまったもので、高級神女「きこゑきみなし」・「とよむきみなし」が「さしふ五人」に子孫を希求して降臨したのである。

以上、先述の二つの構文に現れる「すへ(ゑ)」と「ませ」は靈力ではなく子孫と考えるべきである。そもそも⑥の「ゑそにやませ」と「てたかすゑ」の如く、神号に子孫の意味で「すへ(ゑ)」と「ませ」が対語として使われていることを無関係と考えるべきでもない。卷三一九〇番オモロの対句部では、次のごとく、「神女十・が・は十すへ・ませ(ヲ)十希求して十降れわちへ」構文と神号としての「すゑ」・「ませ」が連続して現れる。

一 きこゑせのきみきや すゑ とめて おれわちへ

又 とよむくにとよみ ませ ねかて おれわちへ

又 首里もり ちよわる ゑそにやすゑあちおそい

又 またまもり ちよわる てたかませうきゆくも

(後略)

ここに対語として連続して現れる「すゑ」と「ませ」の片方が子孫で片方が靈力と見るべき根拠はない。

### III 子孫とは誰か

強調したいのは、「神女＋ゆ・が・は＋すへ・ませ（ヲ）＋希求して＋降れわちへ」の構文と「神女＋が＋すへ・ませ（ヲ）＋選らびやり＋降れわちへ」の構文とに現れる「すへ（ゑ）」と「ませ」は、下級神女を指しているということである。

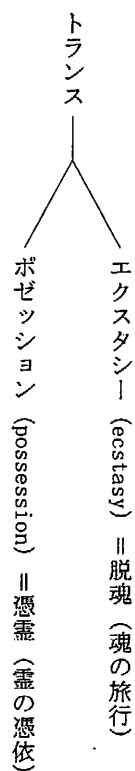
卑見は『おもろさうし全釈』の考えを基本的に支持するものである。『おもろさうし全釈』は、例えば六九四番オモロの説明で、「一節は神としての間得大君が、神の子孫である肉体の自分を求めて天から降りて来て」（第三卷二二八頁）とする。高級神女の子孫である「さしふ」「むつき」等の下級神女を、高級神女の「肉体の自分」と解することは是非の検討は、言語研究を専門とする私の任ではないけれど、参考として波照間永吉『『おもろさうし』の憑霊現象——サシブ・ムツキを中心とした予備的考察——』の論（九三六頁）を次に示す。

オモロの憑霊は、例外なく神霊の生身への降下として表現されていた。セデも上から下へ降ろされると表現されていることから、オモロには上方を神霊の空間、下方を生身（人間）の空間とする考えがあったことが指摘できるように思う。

そして波照間論文は佐々木宏幹『シャーマニズム——エクスタシーと憑霊の文化——』の説を援用

して左のとおり説く（九三六～九三七頁）。

佐々木宏幹氏によるとシャーマニズムにおいて重要な役割を果たすのはシャーマンであり、シャーマンはトランスの状態にあつて超自然的存在と接触・交流してその役割を果たす。シャーマンには脱魂型シャーマンと憑霊型シャーマンがあり、トランスと脱魂・憑霊の相互関係は次のように示される。



この整理に従うと『おもろさうし』におけるサシブ・ムツキ、イケナ・ナリキヨを中心としたトランス（カミとの交感）の表現は、とりもなおさずポゼッションを語ったものとする事が出来るだろう。そして『おもろさうし』におけるトランスはポゼッションに限られているということとも出来ると思われる。

波照間論文は、「憑霊現象を修飾する語句」（九三〇頁）の中で『選で』『尋めて』『首里大君が／さしふ 選で 降れわちへ——中略——又 鳴響む国襲いが／末 尋めて 降れわちへ』（以下節省略）「二一七二四」を示し、「憑依すべきサシブが選ばれたものであり、憑依がある意味では

慎重になされたことを物語っている。」と述べるなど「神女十・が・は十すへ・ませ(ヲ)十希求して十降れわちへ」構文の「すへ(ゑ)・「ませ」が「さしふ」を指すと考えているようである。

真喜志瑠子『おもしろさうし』にみる久米島出自の神サスカサの変容——沖繩中世の官役制度『ヒキ』とのかわり——上七八頁も『さすかさか 末尋めて降れわちへ』(七三七)ともあって、神格のサスカサは、その『末』(子孫)である者に神懸かる、とうたっている。これは前述のように、神とその憑依者は血縁でむすびつくという觀念があつたことを示している。」と説く。ただし、真喜志は「さしふ」を男と考えている。「さしふ」は「ひき」(琉球王国の役人で男)なのだという。また「さすかさ・「あふりやへ」などは神女ではない神なのだという。真喜志論文は従来の研究と大きく異なる思考を展開しており、私は当惑している。

『おもしろさうし辞典』、『沖繩古語大辞典』、岩波文庫本、吉成直樹・福寛美『琉球王国と倭寇——おもしろの語る歴史』は、問題の二つの構文の「すへ(ゑ)」と「ませ」が国王を指していると考えているけれど語いがたい。

『琉球王国と倭寇』は、六九頁で①の例を「聞得大君が太陽神の末裔を求めて天降りをし給い」とした上で、七五―七六頁で次のとおり論ずる。

付した解釈は、二行目の「末」、最後の行の「真末」を「太陽の末・真末(太陽の末裔)」、すなわち国王とみることにによる解釈である。これは、第二尚氏以降、国王を太陽神の末裔とみる思

想、すなわち太陽子思想が存在したことを背景にするものである。

しかし、このおもしろの最後に國比屋武、金比屋武の杜グスクを造営する(第二尚氏の始原地に立ち帰る)ことが謡われることを考えれば、「末」「真末」を従来のように「太陽神の末裔」と解釈するよりは、「今帰仁(金比屋武・國比屋武)に出自する国王」と解釈するほうが意味が明確になる。第二尚氏の出自が謡われているということである。

この論には論理のスリカエがある。①の「すへ」と「ませ」が国王を指すと解する説があるのは、国王は太陽の子であるとする太陽子思想があればこそなのである。この「すへ・「ませ」が太陽の子であることを否定してしまうならば、「すへ・「ませ」を国王とする根拠は無くなってしまうのである。次に『琉球王国と倭寇』一三四―一三五頁は、①が現れる一七〇番オモロについて左のとおり論ずる。

一聞ゑ煽りやへは 名高い煽りやへ神女は

末 尋めて 降れわちへ 子孫を求め尋ねて降臨し給いて

若子思いに 若子思いに

世掛け精 みおやせ 世界を支配する靈力を奉れ

又鳴響む国守りぎや 名高い国守り神女は

真末 尋めて 降れわちへ 子孫を求め尋ねて降臨し給いて

「末」「真末」は子孫の意味であり、「世掛け精」は世界を守護し、支配する靈力のこと。こ

のおもろは一六六を含む一連の煽りやへと国王を謡うおもろ群のなかに位置している。

「煽りやへは子孫を求め尋ねて、天上の世界から降臨し給いて、若子思いに世界を支配する靈力を奉れ」というのが普通の解釈である。しかし、「煽りやへ」が生身の神女であり、「若々しい子なる国王」のもとに降臨する、と解釈したらどうだろうか。

この論はオモロの二重構造を理解せず、対句部に反復句「若子思いに世掛け精みおやせ」をつなげて解釈してしまったための謬見である。対句部と反復句とは分けて解釈しなければいけないのである。

『琉球王国と倭寇』は続けて⑥が現れる七四二番オモロを以下のとおり説く（一三五―一三六頁）。

一聞多煽りやへや／君ぎやすへ 降れわちへ／按司襲いに／おぼつ 鳴響む／君ぎやせぢみ  
おやせ

又鳴響む国守りや／真末 願て 降れわちへ

又てだが末按司襲い／精勝る王にせ

又おぼつせぢ 有らぎやめ／君ぎやせぢ 有らぎやめ

又天ぎや下 襲て／首里杜 栄よわ

このおもろでは、煽りやへは「君ぎやすへ」に降り給うと謡われる。この箇所は通常、「君ぎや精」、すなわち「君ぎやせぢ」と同様に神女の持つ靈力と解釈される。しかし、「君ぎやすへ降れわちへ」の対句は「真末 願て 降れわちへ」であり、さきに掲げたのおもろ（一七〇）の

ように「煽りやへは子孫を求め尋ねて、天上の世界から降臨し給いて」と解釈するほうが筋が通る。「君ぎやすへ」は文字通り「君の末裔」を意味すると考えられる。

ここまでは正しい（岩波文庫本の上四九七頁は「君ぎや精」としている）。この後が問題である。

おぼつは靈力の豊かな場所であり、そこから煽りやへが子である国王のもとに降臨し、おぼつに名高い君ぎやせぢを奉る。「おぼつせぢ」「君ぎやせぢ」ある限り国王は天下を支配し、首里城は繁栄する、と解釈できる。煽りやへは現実の神女であると同時におぼつという靈力の溢れる世界の「母神」という役割を負っている。国王を「てだが末 英祖にや末」と謡う用例は多いが、このおもろの国王は「君ぎや末」である。その「君（神女）」が煽りやへなのである。

ここには、事実の誤認と論理の飛躍がある。

このオモロでも国王は「てだが末」と謡われているのである。そして「このおもろの国王は『君ぎや末』である」というのは飛躍である。「君ぎや末」が誰であるのかを検証しなければならなかったのである。『おもろさうし全釈』第三卷三一〇頁は第一節を「名高く鳴りひびく国の守護者なる阿庇理屋恵（女神官名）は、神の子孫なる自分を望んで、天から降りていらつしやうて」と解釈している。真喜志瑤子『おもろさうし』にみる久米島出自の神々の変容とその歴史的背景——アオリヤへほかと『ヒキ』制度のかかわり——も「七四二は『キミが末』に降りるとうたい、神と神職者との間に血縁関係が想定されていたことがわかる。」（二二三頁）と説いている。「きみ」は、『沖縄古語大辞典』

に「オモロに出る『きみ』は（黍と建物と船を指す同音異義語をのぞいて）例外なく神女であり女性である。男性の『きみ』はない。」とあるけれど、真喜志論文二〇九頁は「きみ」は神女ではない神だとしている。私が真喜志論文を持ち出したのは、真喜志のこの主張を支持しているからではない。『琉球王国と倭寇』が「君ぎや末」を国王としているのに対し、それは決して自明なことではないと言いたいからに過ぎない。

- 「神女＋ゆ・が・は＋すへ・ませ（ヲ）＋希求して＋降れわちへ」構文における「すへ・「ませ」を国王と解するには、㊤の例で「すへ・「ませ」の対語が「さしふ」であることが障礙となる。また㊤の例の「さしふ五ころにすへとめておれわちへ」は、Ⅱで述べたとおり、「五ころ」は五人の蓋然性が高いと私は考えるわけであるけれど、「五ころ」が五人であろうと、神女名であろうと、「さしふ五ころに」国王を求めて降りなさつたと解釈したらおかしいであろう。「おもろ評釈」㊤はこの部分を「託女五人に（なりかわり）（大陽）が齋（王）求めて降り給い」と訳しているけれど、この訳は現在ではもはや問題になるまい。降りる主体は太陽ではなく、高級神女の「きこゑきみかなし」・「とよむきみかなし」である。さらに、「神女＋が＋すへ・ませ（ヲ）＋選びやり＋降れわちへ」構文の「すへ・「ませ」が神女であることの傍証として、「神女＋が＋神女（ヲ）＋選びやり」と謡った以下の例がある。
- ㊦ 一 きこゑてるきみきや

又 こおりきみ ゑらひやり

（後略）（巻七―三五九）

念のために述べておくと、按司を「選ぶ」という表現は『おもろさうし』中に以下のとおり存在する。

- ㊳ 一 きこゑよんたもさ あち ゑらてす まちよたれ（巻十四―一〇三八）  
（名高い読谷山に按司を選んでこそ待ち続けている）
- ㊴ 一 きこゑうらおそいに あち ゑらてす まちよたれ（巻十五―一〇八一）  
（名高い浦添に按司を選んでこそ待ち続けている）
- ㊵ 一 きこゑみやきせんに あち ゑらてす まちよたれ（巻十七―一九六）  
（名高い今帰仁に按司を選んでこそ待ち続けている）
- ㊶ 又 あんしや さと ゑらふ さとや あんし ゑらふ（巻十二―六八五）  
（按司は里を選ぶ 里は按司を選ぶ）
- ㊷ 又 かつれんわ けさむ みやも あんし ゑらふ（巻十六―一三三）  
（勝連は昔も今も按司を選ぶ）

㊸㊹㊺は、「地名＋ゆ・に＋按司（ヲ）＋選らです＋待ち居たれ」という構文で、㊶は「里＋は＋按司（ヲ）＋選らぶ」、㊷は「地名＋は＋按司（ヲ）＋選らぶ」という構文であつて、どれも「神女＋が＋すへ・ませ（ヲ）＋選らびやり＋降れわちへ」構文の「すへ・「ませ」の解釈の参考としては持ち出せないものである。

また、次の例がある。

㊦ あちくゝ ゑらふ おうね かみてたの まふりよわる おうね (巻十三・八〇四)

波照間永吉「オモロ反復句一覧〔巻別〕」五五頁によれば、これは反復句である。『おもろさうし全釈』第三卷三七頁は、「按司たちのえらんだお船だ。日神が見守っていらつしやるお船だ。」と訳す。岩波文庫本(下四〇頁)の「大意(口語訳)」は、「勝れた按司たちの中から一人の人を選んだお船である。太陽神が守り給うお船である。」とする。「按司按司」が主格か目的格か現在の私には判断がつかない。仮に目的格だとして、「按司按司(ヲ) + 選ぶ + お船」という構文である上に、「神女 + が + すへ・ませ(ヲ) + 選らびやり + 降れわちへ」構文が対句部にのみ現れることを考え合わせると、この例も当該の構文の「すへ・ませ」の解釈の参考にならないと言つてよいと思う。

さらに、次の例がある。

㊧ 又 あちゑらひか ふなやれ (巻十三・八一五)

(選ばれた按司の航海)

『沖縄古語大辞典』の「あちーえらび」「按司選び」の項には「選りすぐりの按司。按司の中から選ばれるほど勝れた按司、の意。」とある。これは「〔按司 + 選び〕 + が + 航海」という構成であり、今問題にしている構文の「すへ・ませ」の解釈の参考になり得ない。

ここで立ち止つて考えてみると、卑見に対し次の反論がでてくるかもしれない。

佐藤はⅡにおいて、九〇番オモロに現れる㊦の「すゑ・ませ」と㊧の「ゑそにやすゑあちおそい」「てたかませうきゆくも」の「すゑ・ませ」について、「ここに対語として連続して現れる『すゑ』と『ませ』の片方が子孫で片方が靈力と見るべき根拠はない。」と説く。それは認めるとして、その論理で行けば、㊦の「すゑ・ませ」も太陽の子孫すなわち国王をさしていると思われるべきではないのか。

それでは以下に九〇番オモロの対句部を検討してみよう。

一 きこゑせのきみきや すゑ とめて おれわちへ  
又 とよむくにとよみ ませ ねかて おれわちへ  
又 首里もり ちよわる ゑそにやすゑあちおそい  
又 またまもり ちよわる てたかませうきゆくも  
又 とし 七と おほつたけ おきつめ  
又 ゑか 八とせ しよりもり まとおさ  
又 てるかはか うさし さしふ おれなおちへ

このオモロの第五節の「おきつめ」を「琉球国王の神号と『おもろさうし』一七頁は「おき(や)つめ」とした上で、「神々の加護で」と訳しているけれども、この考えは誤りである。池宮正治はこの論文の前に表した「おもろの表現」二七―二八頁において、拙論の冒頭に示した六九四番オモロの「おきやつめ」について次のとおり説いている。

「おきやつめ」は未詳語とされているが、特定の神仏が特別に加護する意である。現在でもウカチミといって使われている。「お」は接頭語、「きやつめ」は「かつめ」で掴まえることである。ここではおぼつ嶽・かぐら嶽の神々が特に加護することである。

池宮の言うウカチミは国立国語研究所『沖縄語辞典』に次のように見える（アクセントは省略しカシマを読点に改めて引用）。

Yukacimi (名) 特定の仏が特定の人の運命を加護し、左右していること。おつかまへの意。人の生年の十二支の別によってそれぞれ仏が異なる。たとえば寅年の人の YUACIMI は円覚寺の仏、子の年の人のそれは観音堂の仏のようになっており、YUWAN (祈願) をする場合は、それぞれの YUKACIMI の寺院へ行く。△ KACIMI JUN。

『おもろさうしの国語学的研究』一四五～一四九頁は、オモロ語において「あやきやね」（綾金）（巻十一・五六三）、「しらちやね」（白種）（巻十六・一一六七）等、前に i がいないにもかかわらず口蓋化した例があることを指摘しているので、\*オカツメVオキヤツメという変化は想定しうる。池宮説は現代琉球方言との対応を示すこともあり一見したところ説得力があるように見えるけれども、それは錯覚である。

「おきやつめ」が見えるのは、六九四番オモロの第四節の一例のみである。その対の第五節では「おきつめ」になっている。そして九〇番オモロでは「おきつめ」であり、巻十二の七三六番オモロでは

二例「おきつめ」（おほつたけおきつめ／かくらたけおきつめ）が現れている。さらに六九四番オモロは『中山世鑑』（一六五〇年）の巻五に載っているのだけれども、そこでは二つとも「おきつめ」になっている。このことから、六九四番オモロの「おきやつめ」の「や」は、一七一〇年の『おもろさうし』の「書あらため」（再編集）の際の衍字と見るべきである。実は「おきやつめ」の「や」が衍字であることは、他ならぬ池宮が『中山世鑑』所出のおもろ「一三頁で述べていることなのであるけれど。故に「おきやつめ」という表記に基いた池宮説は成り立たないのである。附言しておく、外間守善・波照間永吉『定本おもろさうし』の尚家本をテキストとした校訂テキストが、六九四番オモロの第四節と第五節で「おきやつめ」としているのはもちろん誤りである（同書は九〇番オモロと七三六番オモロでは「おきつめ」としている）。

高橋俊三『おもろさうしの動詞の研究』四二二頁は、「おきつめる（起きつめる？）」「起きつづける」、すなわち『寝起きをずつとする』の意であろう。」とするけれども、この説蓋然性は低い。奈良朝中央語において上二段動詞「起く」の連用形「起き」の「き」は乙類の「き」（「靡き於己立ち」『日本書紀』歌謡八三）である。そしてその被覆形は「起こす」（「末振り於許之」『万葉集』巻十九・四一六四）すなわち乙類のオ列音である。被覆形が乙類のオ列音であるイ列乙類音の対応音は、『おもろさうし』ではエ列の仮名で現れるのである（イ列乙類音と琉球方言の対応法則は拙論『おもろさうし』の木と毛の表記について）を参照されたい。故に奈良朝中央語「起き」の対応形は、『お



もろさうし』に現れるとしたら「\*おけ」乃至「\*うけ」で現れるはずなのである。ちなみに『沖縄古語大辞典』には「おけーたつ【起け立つ】<sup>（国）</sup>」「おける【起ける】<sup>（国）</sup>」と見える。もっとも『おもろさうし』の木と毛の表記についてで述べたごとくオモロ語ではケ／＼の変化は部分的には起きているから、「おきつめ」が「おけつめ」の変化形である可能性（possibility）はゼロではないにせよ、やはり「お（う）けつめ」という表記が一例は欲しいところである。

「おきつめ」を『おもろさうし全釈』第一巻五四九頁は「置き詰め」とする。

『おもろさうし辞典』の「おきつめ（置きつめ）」の項は「置きとどめて。『おきやつめ』の『や』の脱落か。『おきやつめ』参照。隠し止め置かれてか。」とし、「おきやつめ（置きやつめ）」の項は「隠し留め置かれて。」とする。

『南島歌謡論』一八九頁は次のとおり説く。

「おきつめる」という動作は「おきつめ」「おきやつめ」という「第一なかどめ（いわゆる連用形）」のかたちで所出し、『おもろさうし辞典』はこの単語を「置きとどめて。隠し留め置かれて。」と解釈しているが、「（身を）置き続ける」という意味であろう。この単語は滞在をしめている。『沖縄古語大辞典』には次のように見える。

おき—つめる【置き詰める】<sup>（国）</sup>（身を）置き続ける。置きとどめる。例文は、神女が他界の御嶽に滞在することをいう。《とし 七と おぼつだけ おきつめ／ゑが 八とせ しよりも

り まどおき》<sup>（国）</sup>三卷九〇」

岩波文庫本の上七四頁の九〇番オモロの脚注は、「置きつめ 置きとどめて。隠し止め置かれてか。」とする。

何か落ち着かない感じがするけれども、さしあたり「おきつめ」を「滞在し」と解釈して訳してみる。

一 聞得精の君神女が「すゑ」を尋ねて降りなさった

又 鳴響む国鳴響み神女が「ませ」を願って降りなさった

又 首里杜にいらつしやる英祖にや末按司襲い（国王様）のために

又 真玉杜にいらつしやるてだがませ浮雲（国王様）のために

又 年七年天上のおぼつ嶽に滞在し

又 吉日八年首里杜が待ち遠しいと

又 太陽神の御命令でサシブ神女に立派に降りた

「きこゑせのきみ」・「とよむくにとよみ」神女は、下級神女「さしふ」に降りたのである。ここから、④の「すゑ」・「ませ」は国王ではなく下級神女「さしふ」を指していることがわかる。

なお田島本・仲吉本では、一七〇番オモロの④の例の「すへとめて」と「ませ、とめて」に「國求て也」仲吉本・「國求と也」田島本、二〇八番オモロの⑤の例の「ませ」に「しま也」、二九七番オモ

ロの㊦の例の「ませ」に「人の筋目眞筋といふ事也」という言葉聞書が付いている。「國」と「しま」という言葉聞書は、次の㊡の例のように神女が島に降りる例があることから誤解して付けてしまったのではないだろうか。

㊡ 一 きこゑきみなし いつこしま よりおれて

とよきみかなし この みしま つきおれて (巻三一九二)

『沖縄古語大辞典』には、「いつこしま【厳子島】団 兵士のいる島。首里のこと。」「みしま【御島・三島】団 『おもろさうし』に見える地域称、あるいは汎称と思われるが、まだ定説を見るに至っていない。(中略)『みしま』は、美称辞『御』+『島』で、われらが自慢のこの立派な島(村落、地域の意)という意。」と見える。㊡の例の場合は、対句が「しより大きみや首里もりおれわちへ」で、地名が対語となっていることから誤解である可能性もある。あるいは、外間守善・玉城政美『南島歌謡大成 I 沖縄篇上』三八六頁によれば、田島利三郎編『諸間切のろくもいのおもり』収録のウミイ(一五四)に次の例がある(下段は訳)。

一 けよのよかるひに 今日の良い日に

二 なまのまさるひに 今の勝る日に

三 これどわぬおやのろ これぞ我が親祝女

四 おきなんしの オキナンシが

五 さしふしま おれよわちへ さしふ島に降りなさつて

(以下略)

『沖縄古語大辞典』には「さしふーじま【サシフ島】団 サシフなる島。神が降臨、憑依する土地、の意。」とある。「すへ(ゑ)」「ませ」||「さしふ」から、「さしふ島」を連想して「國」「しま」という言葉聞書を付けてしまったのかも知れない。

ここまで、「ませ」とその対の「すへ(ゑ)」が子孫であり、王の神号に用いられた場合以外の二つの定型の構文においては下級神女を指すことを論じた。

#### IV 「ませ」の語源

ところで「ませ」の語源は漢語の末世あるいは末生だと思ふ。日本国語大辞典第二版編集委員会『日本国語大辞典第二版』には次のように見える。

まつせ【末世】㊡ すえの世。ずつとのちの世。後世(こうせい)。後代。末代。\*太平記(14c後)

六・正成天王寺末来記披見事「是は持統天皇以来末世(マッセ)代々の王業」\*俳諧・犬子集(1623) 九・秋「末世にも妻恋の名や残す覧 鹿を題にてよみし歌人ハ長吉」\*浮世草子・好

色盛衰記(288)一・一「いかなかな神武此かたなひ事なり、是末世(マッセ)の咄(はなし)のたね」

まつ―せい【末世】末の世に生まれた者。後世に生まれた者。\*玉葉―寿永二年(1183)八月一日「況区々之末生、不肖之愚臣、得而不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>言上」\*近代秀歌(1209)「このごろの後生、まことにうたとのみ思ひて、そのさましらぬにや侍らむ」

中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義『角川古語大辞典』には以下のように見える。

まつせ<sup>マッセ</sup>【末世】■「(末)世(マセ)セ」(易林本節用)①のちの世。後世。「末世迄あかしの浦で目をさまし」(柳多留・一三)②仏語。末法(まつぽふ)の世。末代(まつだい)。「末代末世の重罪の輩も唱へば必ず来迎に預るべし」(源平盛衰記・三九)「ひとつは末世の奇特ぞと思ひながらも尋ね行けば」(謡・檜垣)「今、末世濁乱の時分なれ共」(太平記・二七)

まつせい<sup>マッセイ</sup>【末生】末の世に生れた者。「後学末生」と続けて用いられることが多い。「区々之末生、不肖之愚臣」(玉葉・寿永二・八・一四)「このごろの後学末生、まことにうたとのみ思ひて」(近代秀歌)「今の後学末生<sup>まつせい</sup>、禁制の詞と名付て、書持て侍れど、一切其謂をわきまへず」(無名野草・上)

末生の場合、末尾のイが問題であるけれども、イの脱落は説明可能である。Iで述べたように、/sei/(精)に由来する霊力が『おもしろさうし』では「すへ(ゑ)」と表記されている。この語は、「せこ」(巻

四―一八〇、巻十一―六三二他)乃至「せ」(巻三―一九七、巻十九―二一九七他)という表記でも現れる。『おもしろさうし』では、「せ」の仮名は「<sup>se</sup>」を表し、「す」の仮名は「<sup>su</sup>」と共に「<sup>se</sup>」は「<sup>se</sup>」と共に「<sup>se</sup>」を表しているから、「すへ(ゑ)」は「<sup>se</sup>」を表しているのである。『沖繩古語大辞典』は、「すへ(ゑ)」の沖繩祖語形を「<sup>su</sup>」とし、「せい」の沖繩祖語形を「<sup>sei</sup>」とするけれども、「すへ(ゑ)」と「せい」は祖形/\*sə/に遡る同じ言葉の異表記と見るべきであろう。「せ」は「<sup>se</sup>」の末尾の「<sup>se</sup>」が脱落したものである。このことからマッセイのイの脱落が説明可能である。故に「ませ」が真末であるという従来の説も、「すへ(ゑ)」は「<sup>se</sup>」の「<sup>se</sup>」が脱落したという説明が可能なわけで、可能性は認め得る。なお『おもしろさうし全釈』第五卷三二八頁は「ませ」を『せ』は『すち』(筋)の表記『せち』の略」とするけれども、「ち」の脱落は類例が無く不可。

「ませ」を末世ないし末生と考える場合、促音の存在が問題となる。『おもしろさうし』における促音の問題について、『おもしろさうしの国語学的研究』は、「第一章『おもしろさうし』の言語の概説」で「つまる音が存在したかと思われる。(存在したにしても一モーラとはみなされなかったであろう。)」と述べて「もちちへ・もちゑ(持って)」という例を示し(六頁)、「第二章 音韻詳論」(六九頁)では次のとおり述べる。

促音はタ行四段動詞の接続形の時、「ち」と表記されることがある。ただし、表記のまま発音したのではなからうかという意見もある。

- (1) うちへ・うちちゑ(打って。「うちへ」の表記もある)
- (2) もちへ(持って。「もちへ」「もちちゑ」の表記もある)
- (3) うちちへ(討って)
- (4) たちちへ(立って)

オモロ語ではタ行四段動詞の接続形以外に促音は存在しなかったとすれば、末世・末生のマッセは「ませ」[mas]で受け入れるしかなく、タ行四段動詞の接続形以外にも促音は存在したが表記されなかったのだとしても、末世・末生のマッセは「ませ」と表記されることになる。

末世と末生ともに可能性は認め得る。末生の方が意味は子孫に近いけれども、末世が後代・末代の意から子孫の意となることは考え得るであろう。とりあえず、「ませ」は末世の蓋然性が高いとしたい。その理由は次の二点である。

一、末世ならばイの脱落をあえて想定しなくて済む。

二、六九四番オモロをはじめ王様の意で多出する「わうにせ」について、「琉球国王の神号と『おもろさうし』九〇一〇頁は次のとおり述べている。

詳しい説明をいまだ見ないが、表記を尊重すれば「王二世」と解される。二世とは現世と来世にまたがって王の位を継ぐようにとの願いを込めた王に対する讃えことばであろう。もとは仏教語である。

二世があるなら末世があってもおかしくないのではなからうか。

## V 卷十二―六九四番オモロの解釈

最後に冒頭に示した卷十二―六九四番オモロの現代語訳を示したい。しかし、このオモロは難物である。

このオモロは、第一節の後のみ反復句を表記しているので、反復句を復元した復元オモロをまず示す。一字下げが反復句。第四節の「おきやつめ」の「や」はⅢでのべたとおり衍字であるから省く。第八節の「もちやへこた」も諸本異ならないけれど、『校本おもろさうし』が「二二ノ八九、三ノ六三、その他すべて『もりやへこた』とある。『り』をとる。」とするのに従い「もりやへこた」とする。

六九四番オモロ復元本文

- 一 きこゑ大ききやすへゑらひやりおれわちへ
- あんしおそいしゆきみきやせちもちよわれ
- 又 とよむせたかこかせねかておれわちへ
- あんしおそいしゆきみきやせちもちよわれ
- 又 いけなきみそろへてなりきよかみあとへて

あんしおそいしゆきみきやせちもちよわれ  
とし八とせなるきやめおほつたけおきつめ

あんしおそいしゆきみきやせちもちよわれ  
ゑか八とせなるきやめかくらたけおきつめ

あんしおそいしゆきみきやせちもちよわれ  
あんしおそいかおこときみてつりまとさ

あんしおそいしゆきみきやせちもちよわれ  
わうにせかおことみものあすひまとさ

あんしおそいしゆきみきやせちもちよわれ  
大ころたそろへてもりやへこたあとへて

あんしおそいしゆきみきやせちもちよわれ  
きみいきよいこのめぬしつかいこのめ

あんしおそいしゆきみきやせちもちよわれ  
つかいてゝよしられおことてゝよしられ

あんしおそいしゆきみきやせちもちよわれ  
あかくちやかよいつきおほつたけとよて

あんしおそいしゆきみきやせちもちよわれ  
あんしおそいかおこと大きみにしなて

あんしおそいしゆきみきやせちもちよわれ

解釈が大きく別れる点が色々ある。第六節と第七節の「あんしおそいかおこと きみてつり まとさ」・「わうにせかおこと みものあすひ まとさ」を、『おもしろさうし全釈』と岩波文庫本は、このオモロの語り手の心情とする。『南島歌謡論』と「おもしろ表現」は、「きみてつり まとさ」・「みものあすひ まとさ」から第十節の「つかいてゝ よしられ おことてゝ よしられ」までを「あんしおそい」・「わうにせ」（王様）の「おこと」（御言葉）の内容としている。決め手を欠くけれども、「おこと」の内容と解釈すれば——補うとしたら——「おこと」の後に係助詞の「は」を補うだけですむから（「おもしろ表現」は「に」を補っているけれど）、「きみてつり まとさ」・「みものあすひ まとさ」以下「つかいてゝ よしられ おことてゝ よしられ」までは国王の台詞と考えることにする。「よしられ」（「よしられ 又のたてれ 奏聞して也」『混効験集』坤・言語）を、『おもしろさうし全釈』は「申し上げ」とし、岩波文庫本は「お知らせがあり」とし、「おもしろ表現」は「申し上げよ」とする。国王の台詞の末尾とする立場からは「申し上げよ」と解すべきである。

「おもしろ表現」は第九節の「このめ」を「企図し」・「企画し」と訳しているけれど、『おもしろさうしの動詞の研究』二二二〜二二三頁によれば、「このむ」（企てる）は四段活用であって「このめ

は命令形である。

第十一節の「よいつき」の解釈にも問題がある。『おもろさうし全釈』が「寄り付き」、岩波文庫本が「依い憑き」とするのに対し、「おもろの表現」は「結い付き」とする『南島歌謡論』は「感応して」と訳している。『沖縄古語大辞典』は、「より―つく【依り憑く】<sup>團</sup> 神霊が依代に憑依する。『ゆいつく』に同じ。」とする。「依り憑く」と「ゆいつく」を「同じ」とするのはいかなものか。辞書で「〇〇と同じ」とあったら、普通はその〇〇が項目にあるものであろう。この辞典でも「せい【精】」の項の『すへ（精）に同じ。』という記述にはそれがあてはまる。ところが「ゆい（ひ）つく」という項目はない。混乱があったのではなからうか。「結い付く」よりも「依り憑く」の方がわかりやすいけれども、「依り憑く」と解釈しにくい理由がある。『おもろさうしの動詞の研究』五一頁は、「從來『依い憑く』の音変化形とされてきたが、『よりおれる（依り降れる）』の時の『より』は『い』に変化していないので、『結い付き』が穏当であろうか。」とする。「依り憑く」の確例は『おもろさうし』に存在しない。「ゆいつく」（巻三―八八、巻廿―三四六）という例もある。『おもろさうしの国語学的研究』一一―一二頁が指摘するように、冬を「ふよ」（巻十一―六四三他）、露を「つよ」（巻二―三九他）と表記してあるなど、『おもろさうし』に「ゆ」と「よ」の混同例は多い。故に「よいつき」を「結い付き」と解することは可能である。『おもろさうしの動詞の研究』は「連用形の例は全て『あかくちや』『ぜるまま』が主語になっている。」と指摘する。連用形以外に接続形「よ（ゆ）

いつちへ」が現れるけれども、その場合は「又あかくちやによいつちへ又せるまゝによいつちへ」（巻十一―五七六）の如く与格が「あかくちや」「せるまゝ」であり、「よ（ゆ）いつく」は火の神である「あかくちや」「せるまゝ」とセットでしか現れない語なのである。そのような制約のない「依り降れる」や「依り降ろす」の「依り」とは無関係な語と見るべきだと思う。故に「結い付き」と解釈することにする。

## 現代語訳

### 対句部

一 聞得大君が子孫である神女を選んで降りなさった

又 鳴響む精高子が子孫である神女を願って降りなさった

又 イケナ神女を揃えた ナリキヨ神女を集めた

又 年八年になるまで天上のおぼつ嶽に滞在し

### 反復句

王様こそ大君の靈力を持ち給え

王様こそ大君の靈力を持ち給え

王様こそ大君の靈力を持ち給え

王様こそ大君の靈力を持ち給え

又 吉日が八年になるまで天上のかぐら嶽に滞在し

又 王様のお言葉は 君手摩りの祭式が待ち遠しい

又 王様のお言葉は 美しい神遊びが待ち遠しい

又 立派な男達を揃えた 守護する人々を揃えた

又 神女の招請を企てよ 神女の招請を企てよ

又 使者だと言つて申し上げよ お言葉だと言つて申し上げよ

又 火の神赤口が結び付き天上のおぼつ嶽に王様のお言葉が鳴り響いた

又 王様のお言葉が開得大君と調和した

王様こそ大君の靈力を持ち給え

王様こそ大君の靈力を持ち給え

王様こそ大君の靈力を持ち給え

王様こそ大君の靈力を持ち給え

王様こそ大君の靈力を持ち給え

王様こそ大君の靈力を持ち給え

王様こそ大君の靈力を持ち給え

王様こそ大君の靈力を持ち給え

# 注

(一)「せぢ」をはじめとする靈力について「不可視の靈力」という定義が普及している。それに対し、池宮正治「王と王権の周辺——『おもろさうし』にみる——」は次のように「可視の靈力」とであると説いている(一九八〇二二頁)。

仲原善忠は一九四七(昭和二十二年)年「セヂ(靈力)の信仰について」(柳田国男編『沖繩文化叢論』)を発表して柳田の激賞を受けたと言われる。そのなかで仲原はせぢを規定して「不可視の靈力」としている。上に挙げたせぢや、神女や王、長寿者のように、靈力の満ち満ちた者が発する靈力が、見えないと言う場合、それはどの状態をいうのであろうか。確かに、現在のすっかり衰えたシーやシジは、視覚的なイメージとしては想念しようもないが、『おもろさうし』のなかでは目に見えるものとしてはつきり表現されている。祭りあるいは呪術のイメージ・想念は、その枠外の者には幻想に過ぎないが、その共同体のなかでは紛れもない「事実」としてあるのである。例えば、一四の三六、

一 佐敷金杜に

おわもりは 遊ばちへ

黄金のもぢろきよる

きよらや

又根国金杜に

佐敷の金杜におわもり神女が神遊びして、黄金のように輝いているさまの美しさよ、と言う意である。「もぢろきよる」は「あけもぢろ」の「もぢろ」とも関わり、「もぢろく」(動詞)の語幹が名詞化したものである。本土古語の「もぢろ」(名詞)、「もぢろく」(動詞)とも縁を引くものである。おもろの例では光が発散放射するさまのように思われる。神女が神遊びをすると、せぢが充満して、黄金のように眩しい光を発散するのである。(中略)

せぢを仲原善忠の「不可視」に対して「可視」とした。せぢは輝き発散しているのである。「あけもぢろ」も「もぢろ」も「もぢろ」もみなそうしたイメージである。常套句の「よかる日」に対する「きやかるひ」(輝く日)も、

「多か」(良日)に対する「きら」も、せちが光りのように輝き放射発散する表現である。これはおもろのせちを考える上で重要なポイントだと私は思っている。

この可視説に私は賛成である(池宮は『おもろさうし』における霊力の諸相と表現——霊力は不可視か——)において可視説を敷衍している。もっとも「セチ(霊力)の信仰について」には「不可視」という言葉は出てこない。仲原はそこでは「せち」を「その本質は人間世界の外に実在する非人格的——それ自身は無意識——の霊力と規定すべきもの」と述べている。仲原の『おもろ新釈』八二頁には「セチ(せち)」という不可視の霊力に対する信仰は、長く広く、今でもそのあとを引いている。」と見える。不可視の霊力という定義は、不可視であることが論証されないまま、仲原が『おもろさうし辞典』に書いたためにまかり通ってしまったということであろう。

福寛美「世と玉の論」二二六―二二七頁は、「玉も世掛けセチも、おそらく神女の手によって廻され、捧げ持たれ、男性支配者に奉られたのである。このことは『世掛けセチ』が玉と同じ形をしている、つまり玉にこめられている、ないし不可視の霊力の目に見える形象が玉である、ということの意味しているであろう。」と説く。これは福の意図に反して、「せち」は可視だと言っていることになるのである。不可視と言うならば見えないはずである。

(2) 上巻の「凡例」には「大意」とあり、下巻の「凡例」には「口語訳」とある。

(3) この辞典の「凡例」には、「見出しは、文献資料の表記と語源を手掛かりにして再構した形にした。」とあり、略号について次の説明がある。

団 『おもろさうし』所出のもの

因 『南島歌謡大成 沖縄篇上』所収の古謡

因 『南島歌謡大成 沖縄篇下』所収の琉歌など

因 『琉球戯曲集』所収の組踊

因 『混効験集』所収の語

因 複合語中の重要な語素

(4) (一) 内は尚家本虫損。田島本・仲吉本により補う。

(5) 非で示したオモロは、重複オモロとよばれるほほあるいはだいたい同じオモロ。重複オモロとは何かという問題について波照間永吉「重複オモロの考察——『重複』の実態と『重複』概念の提示——」が詳しいので参照されたい。

(6) 尚家本・田島本・仲吉本いずれも「めて」がない。この七二四番オモロの第二節に「とよむくにおそいかすへとめておれわちへ」とあり、伊波普猷「校訂おもろさうし」が「めて」を補うのを支持する。

(7) 「わちへ」の「く」連用形+「て」に由来する「接続形」が句末に來た時は、「くして」ではなく「した」と訳した。服部四郎「日本祖語について」12「一六頁は『中山伝信録』(七二二年)の「下雨 阿梅福福的」「下雷 又急福福的」の「福福的」について次のとおり述べている。

形としては「降りて」に対応するけれども、当時の琉球語としては『降った』の意味と考られる。現代首里方言でもそれに近い意味に用いられることがあるけれども、

hutan 『降った』 hutii 『降ったか』

hujan 『降る』 hujumi 『降るか』

という活用体系の hutii (= hutii) 『降った』+「か」にその名残りをとどめている。

そして、かりましたしげひさ「オモロの条件形」五一四―五一五頁は、卷廿一―二四九七番オモロの「のぼて」について次のとおり述べている。

この問答形式のオモロにでてくる「のぼて」は「のぼった」という断定の過去形に訳されるものである。また、第4節、第5節の「のぼてが」は「のぼったか」と訳されるもので、疑問詞むすび形(なお「何」という疑問詞のかりむすびのかたち)の過去形である。この例から第二中止形「接続形のこと——引用者」に由来する過去形の存在は容易にみとめることができる。

(8) 外間守善「混効験集 校本と研究」一三三頁は「探索」と読んでいるけれど、『琉球古語辞典 混効験集の研究』二七三頁は「探索」と読み、「束」の字の傍らに(案)としている。凡例に「評定所本文において虫食いその他の理由で判読不能の箇所については、他本を参照の上括弧( )に括って示した。」とある。『混効験集』の原本である評定所本の影印を見ると当該の字は束に見える。しかし、探索という語は『大漢和辞典』にも見えないので探索と



した。

(9) もっとも◎の例の主体も「き」を大きく「こ」とよむせたか」である。

(10) 本文「おれなうち」は「降れ直す」の接続形である。「降れ直す」の解釈は、『沖繩古語大辞典』の「おれ—なほす」の項の「立派に降りる。『なほす』は、立派に—する、意」に拠った。

(11) 「むつき」は『沖繩古語大辞典』に「も—つき【物憑き】困 神の憑依する神女。」とある。

(12) 「およりとて」を仲原善忠「おもしろ評釈」は「お為、とては取りて、(中略) お為を計ってと云うほどの意。」とし、岩波文庫本上二三〇頁は「お為だといって」とする。『おもしろさうしの国語学的研究』の「第三章 文法詳論」の「第三節」とで「考」が、オモロ語に格助詞の「とて」は存在せず、「とて」は「取りて」だとするのに従う。

(13) 本文の「まちよたれ」は、「待つ」の連用形に継続を表す「をり」が融合した「まちより」に完了の助動詞「たり」の已然形が接続した「まちよりたれ」から「り」が脱落したもの。已然形終止なのは、前に已然形終止を要求する係助詞「す」があるからである。

(14) 『おもしろさうし』の木と毛の表記について、<sup>オモロ</sup>棕櫚毛と解釈し、オモロ語にケヅキの変化が起きている証拠の一つとした巻十三・七九〇番オモロの「するきほう」(するきほう 蕤帆之事『混効験集』坤・器材)に岩波文庫本は「スルギ草(和名ヒトモトススキ)で編んだ帆。」(下三三頁)という脚注を付けている。この「するき」はヒトモトススキ説は拙論が発端なのであろうか。拙論で述べたことをかいつまみ一部詳述する。

『校本おもしろさうし』には七九〇番オモロの頭注に「原注(蕤帆之事)とある。するき(蒲)でおったむしろの帆。」とある。『校本おもしろさうし』の頭注の担当者である仲原善忠は久米島の出身であつたけれど、久米島の方言では蒲は「[komo]」であり「するき」との対応は考えられない。蒲説の根拠を探ると仲原の弟であつた仲原善秀の『久米島の歴史と民俗』に「比嘉ムラの前方のスルギ原は、その名の通りスルギ草や蒲(カマ)の密生した沼地」という記述がある。そこで私は久米島に赴いた。スルギ原はサトウキビ畑になっておりスルギの正体は確認できなくなつていたけれど、仲里村教育委員会の平良朝春氏の御協力により、仲里村比屋定ハント原でスルギを確認した。久米島を離れる際、私は平良氏に植物学者に依頼してスルギの和名を確認していただくようお願いした。平良氏か

ら手紙をいただき、植物学が専門の上江州盛元氏に照会したところ、カヤツリグサ科のヒトモトススキであることがわかつたのであつた。私が久米島で調査した限りでは、スルギは使い道のない雑草とのことであつたので、スルギは「オモロ語の『するき』とは無関係と考えるべきである。『するき』は蒲説は、蒲が蕤の材料の一つであることと、[komo]が蒲と同じ土地に成育していたことに基く、仲原善忠氏の勘違いから生じたものであろう。」と述べた。

拙論が公表されたのは一九九六年であるが、翌一九九七年の正月に拙論の首里方言の話者である久手堅憲夫氏からいただいた年賀状に「貴君の研究のスルギ(植物名)について新事実がわかつたのでお知らせします。ススキの葉に似た植物で帆船の帆に使用された。くわしくは次の機会に」と書いてあつた。久手堅氏に電話をすると、氏が代表を務める『琉球国由来記』研究会の会員で久米島出身の長老である宮城幸吉氏に聞いたところ「スルギで船の帆を作っていたそうだ。」とおっしゃつた。そこで宮城氏に電話をすると、「昔はススキで船の帆を作つたという話を聞いたことがある。スルギの和名がヒトモトススキであることから、スルギで帆を作つたのではないか。」とのことであつた。宮城氏は「外間君も伊波先生や仲原先生が棕櫚だというから棕櫚だと思つていた。」と言つた。とおっしゃつた(久手堅氏によれば宮城氏の卒寿を祝うパーティーに外間守善氏が出席していたとのことである)。宮城氏と私は未見の間柄であり、電話での会話であつたため、話が通じなかつたおそれがあるので、私は拙論の抜刷(スルギを述べた部分に付箋を付けた)と「電話での話では、スルギで帆を作つたという確たる事実があるわけではなく、スルギの和名がヒトモトススキであることから、スルギで帆を作つていたのではないかという推測であると理解したが、この理解で正しいでしょうか。」という旨の手紙を氏に送つた。宮城氏から返事は来なかつた。しばらくして(正確な月日は憶えていない)別の用件で宮城氏に電話をすると、氏は「あつ佐藤さん。」と言つて快く応対して下さつたが、氏はスルギのことを口になさなかつた。宮城氏に手紙を送つた時、久手堅氏にも「宮城氏に電話で話を聞いたかぎり、久手堅先生から聞いた話と食い違ふ点があり、スルギで帆を作つたという事実があるわけではなく、ヒトモトススキという和名からの推測とのことでした。事実か推測か久手堅先生からも宮城氏に確認していただきたい。」という旨の手紙を送つた。その後久手堅氏とは何度もお会いしているけれど、氏はスルギに

ついで口になさらない。久手堅氏の場合と同様に、外間守善氏にも宮城氏の推測が事実化けて伝ったのではないだろうか。宮城氏の言う外間氏の言のうち、「仲原先生が棕櫚と言う」というのは、仲原が「するき」を蒲と書いていることと辻褃が合わないのだけれども、宮城氏はそうおっしゃったのである。

宮城氏の推測の難点は、ヒトモトスキがカヤツリグサ科の学名 *Cladium jameicense* Crantz ssp. *chinense* [Koyama] であるのに対し、スキがイネ科の学名 *Miscanthus sinensis* Anderss. であることである。宮城氏は元理科の教員であるけれど、「化学が専門で植物は詳しくない」とおっしゃっていた。

久手堅氏の私信を引用させていただいた上に、記憶に頼って書いた面が多いので、二〇〇六年十月に久手堅氏に右記の文章を添えて問題や誤りがある場合は御一報いただきたいという手紙を送ったところ、氏から「当初の質問や返事のいきさつについては、今記憶にないが、宮城幸吉先生も百歳になって、全首にもなっていて、当時の経緯を尋ねようがない。」という御返事をいただいた。

仮にオモロ語の「するき」が久米島比嘉方言の「[su:gi] (ヒトモトスキ) である」とすると、この語はやはりオモロ語でケヴィキの変化が起きていたことの証左となる。なぜなら比嘉方言の「[gi]」は *\*gi/*ではなく *\*ge/*に遡るからである(荒 *ha:gi* : 影 *ka:gi*)。 *\*gi/*に遡るのは「[di]」である(釘 *kudsi* 麦 *mudsi*)。二〇〇六年十月の調査。話者は宇江城昌周(一九二八年生)、平良曾清(一九二九年生)、江州良徳(一九三〇年生)、宇江城サダエ(一九三一年生)の四氏である。

その後ふたたび久手堅氏からいただいた手紙の一部を以下に示す。

首里方言では棕櫚についてスルギという言い方はないが、その葉根を保護している茶色の繊維状の被褥をスルガー(棕櫚皮)と呼んでいる。

この繊維は極めて強く縄になっても腐敗もせず、また編んだ布状のものを沖縄本島と周辺離島また山原からの薪炭材を積んだ帆船の帆に使用していたように定かではないが、おぼろげに記憶する。

(15) 田島本は齋藤郁子の翻刻七六頁から引用。凡例に「旧漢字は原則として当用漢字に改めた。」とある。

(16) 『日本国語大辞典第二版』の「まーすえ」の項には次のとおり見える。

最も末であること。最後。\*改正増補和英語林集成(1886) [Masuye, Masue (訳) 最後に生まれたもの。家系の最後]

(17) 卷十二・六九五番オモロの「あかくちやかよいつ」の「二」は諸本異同ないけれども、「き」の誤記ないし誤写であろう。

#### 参考文献

- 池宮正治 『中山世鑑』所出のおもろ、『琉球大学法文学部紀要国文学論集』三二号 一九八八年
- 池宮正治 『王と王権の周辺——『おもろさうし』にみる——』琉球新報社『新琉球史——古琉球編——』一九九一年
- 池宮正治 『琉球古語辞典 混効験集の研究』第一巻 一九九五年
- 池宮正治 『おもろの表現——適合調和する讃歌』『日本東洋文化論集 琉球大学法文学部紀要』一〇号 二〇〇四年
- 池宮正治 『琉球国王の神号と『おもろさうし』』『日本東洋文化論集 琉球大学法文学部紀要』一一号 二〇〇五年
- 池宮正治 『おもろさうし』における霊力の諸相と表現——霊力は不可視か——『日本東洋文化論集 琉球大学法文学部紀要』一二号 二〇〇六年
- 伊波普猷 『校訂おもろさうし』南島談話会 一九二五年
- 伊波普猷・東恩納寛博・横山重 『琉球史料叢書』四・五 東京美術 一九七二年
- 沖縄県教育委員会 『蔡鐸本中山世鑑』沖縄県教育委員会 一九七三年
- 沖縄県教育委員会 『評定所本混効験集』沖縄県教育委員会 一九八四年
- 沖縄県教育庁文化課 『重新校正中山世鑑』沖縄県教育委員会 一九八三年
- 沖縄県立博物館 『尚家本おもろさうし』(複製本) ひるぎ社 一九八〇年
- 沖縄古語大辞典編集委員会 『沖縄古語大辞典』角川書店 一九九五年
- かりまたしげひさ 『オモロの条件形』『沖縄文化——沖縄文化協会創設四〇周年記念誌』沖縄文化協会 一九八九年
- 中南大学地域文化研究会 『おもろさうし原注索引』南西印刷出版部(ひるぎ社) 一九八〇年

- 国立国語研究所『沖繩語辞典』大蔵省印刷局 一九六三年
- 齋藤郁子「田島本おもしろさうし」『沖繩芸術の科学』二二号 沖繩県立芸術大学附属研究所 二〇〇〇年
- 佐々木宏幹『シヤーマニズム——エクスタシーと憑霊の文化——』中央公論社 一九八〇年
- 佐藤清『おもしろさうし』の木と毛の表記について『琉球の方言』二〇号 法政大学沖繩文化研究所 一九九六年
- 佐藤清「すからの速御船」『琉球の方言』二六号 法政大学沖繩文化研究所 二〇〇二年
- 高橋俊三『おもしろさうしの動詞の研究』武蔵野書院 一九九一年
- 高橋俊三『おもしろさうしの国語学的研究』武蔵野書院 一九九一年
- 玉城政美『南島歌謡論』砂子屋書房 一九九一年
- 玉城政美『おもしろさうし全釈』清文堂 一九六八年
- 鳥越憲三郎『セヂ(霊力)の信仰について』柳田国男『沖繩文化叢説』中央公論社 一九四七年『仲原善忠全集』沖繩タイムス社 一九七八年
- 仲原善忠『おもしろさうし』『文化沖繩』沖繩文化協会 二巻七号 一九五〇年『仲原善忠全集』沖繩タイムス社 一九七八年
- 仲原善忠『おもしろさうし』第四巻一二六頁より引用
- 仲原善忠『おもしろさうし』『琉球文教図書』一九五七年
- 仲原善忠・外間守善『校本おもしろさうし』角川書店 一九六五年
- 仲原善忠・外間守善『おもしろさうし辞典・総索引』角川書店 一九六七年
- 仲原善忠・外間守善『おもしろさうし辞典・総索引第二版』角川書店 一九七八年
- 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義『角川古語大辞典』第五巻 角川書店 一九九九年
- 日本国語大辞典第二版編集委員会『日本国語大辞典第二版』第十二巻 小学館 二〇〇一年
- 服部四郎「日本語について・12」『言語』八巻二号(大修館書店) 一九七九年
- 波照間永吉『おもしろさうし』の憑霊表現——サシブ・ムツキを中心とした予備的考察——『文学』五四巻一〇号(岩波書店) 一九八六年『南島祭祀歌謡の研究』砂子屋書房 一九九九年 収録『南島祭祀歌謡の研究』より引用

波照間永吉「オモロ反復句一覧(巻別)」『沖繩芸術の科学』四号 沖繩県立芸術大学付属研究所 一九九二年

波照間永吉「重複オモロの考察——「重複」の実態と「重複」概念の提示——」『沖繩文化研究』二二号 法政大学沖繩文化研究所 一九九六年

比嘉実『沖繩研究資料14 尚家本』おもしろさうし 法政大学沖繩文化研究所 一九九三年

平山良明「再び『島が命』について」おもしろさうし研究会『おもしろさうし精華抄』ひるぎ社 一九八七年

福寛美「世と玉の論」『沖繩文化研究』二四号 法政大学沖繩文化研究所 一九九八年

外間守善『混効験集 校本と研究』角川書店 一九七〇年

外間守善・玉城政美『南島歌謡大成 I 沖繩篇 上』角川書店 一九八〇年

外間守善『おもしろさうし』岩波書店 二〇〇〇年

外間守善・波照間永吉『定本おもしろさうし』角川書店 二〇〇二年

真喜志瑠子『おもしろさうし』にみる久米島出自の神サスカサの変容——沖繩中世の官役制度『ヒキ』とのかかわり——『学習院大学国語国文学会誌』四五・四六号 二〇〇二・二〇〇三年

真喜志瑠子『おもしろさうし』にみる久米島出自の神々の変容とその歴史的背景——アオリヤへはかと『ヒキ』制度のかかわり——『沖繩文化研究』二八号 法政大学沖繩文化研究所 二〇〇二年

宮里朝光『琉球歴史便覧』月刊沖繩社 一九八七年

吉成直樹・福寛美『琉球王国と倭寇——おもしろさうしの語る歴史』森話社 二〇〇六年

『日本書紀』は新編日本古典文学全集(小学館)、『万葉集』は新日本古典文学大系(岩波書店)を用いた。

久米島比嘉の話者の方々と久手堅憲夫氏に感謝申し上げる。